

## 〈はじめに〉

宮沢賢治の「銀河鉄道の夜」に、主人公のジョバンニが印刷所で植字をする場面があります。植字とは、活版印刷で版を作るために活字をひとつずつ選び出し、それを原稿に従って組んで行く作業です。学校が終わったあと、家計を助けるためにその内職をしているジョバンニは、虫眼鏡をのぞき込んで“まるで粟粒ぐらの”活字を拾い、報酬として小さな銀貨を1枚もらいます。◆このような植字は、世界中の言語の印刷で行われていましたが、日本語の植字はことのほか大変な作業でした。なぜなら、アルファベットなどと比べ、日本語は世界でも類をみない多種の文字を使う言語だからです。ひらがなは清音だけでなく、濁音・半濁音・促音などの特殊表記があり、さらに同じ数だけのカタカナがあります。そして何よりも、膨大な漢字群。日本語植字は複雑・過酷であり、植字熟練工の存在が不可欠でした。ただ、活字というのは特別なものであり、以前の日本では、自分の書いたものが活字になるということは極めて稀で、手書き文字だけで一生を終えるという人がほとんどでした。◆そして現在。人々はこぞって、自分のSNSやブログに活字を打ち込んで文書を作り、印刷データはそのほとんどがDTP(卓上印刷)で作られています。それらを可能にしたのが日本語ワープロ機(ワードプロセッサ)の出現でした。ことにその、漢字変換機能は革新的で、それが庶民の商品となると、日本人の言語生活に大きな影響を与え始めました。そしてその機能がパソコンや携帯電話に搭載されるに及び、私たちの生活は一変しました。インターネット空間とその中で活動するための「活字」と「漢字」を手に入れた私たちは、社会に発信する表現者としての自分を発見し、社会全体も大きく変えつつあります。またワープロという強力な体外知性の出現により、日本人のことばの能力や教育にも変化が見られ始めてきています。その中でも、今回のテーマである漢字は、もっとも大きな転換点に立たされているのではないのでしょうか。◆漢字の置かれている状況の変化は、IT機器によるものばかりではありません。いま日本では、外国とつながる人の数が飛躍的に増加しています。日本語を母語としない人たちにとって、習得においても運用においても、もっとも難しいのが漢字です。それらの人たちとの共生のための“やさしい日本語”が求められる中、漢字は難しい立場に置かれています。実際、国際化という点で、漢字の複雑さ・難しさはハンディであり、近代化の流れの中で世界の漢字文化圏は狭まりつつあります。でも・・個人的には漢字はどうしてもなくてはならない存在です。◆たとえば、「銀河」。銀河という単語は、中国に古くからあることばです。大和ことばの「天の川」の、夢見るような優しい響きとくらべて、神秘性や荘厳さが強く感じられます。自分にとって銀河ということばは、話しことばの/ginga/でも、ひらがなの「ぎんが」でもなく、初めから本に印刷された「銀河」という文字でした。だから「銀河」は、自分にとっては意味も音も形もすべてが一体となったことばであり、また“象徴”です。銀河という字を見ると、彡(さんずい)や、「銀」の字のはね・はらいのためか、まるでそれが周りに光りを放っているようにさえ見えます。多分、賢治も「銀河」という文字の魅力に取り憑かれた一人だったのではないのでしょうか。ジョバンニの内職を植字にしたのには、きっと深い意図があると思います。なぜなら物語の後半に、印刷に関係する場面がもうひとつ出てくるからです。銀河鉄道の中で、黒い帽子をかぶった男が、ジョバンニに、一冊の地歴の本を見せます。男が本を開くと、そこには遙かな昔の世界の地図と歴史が描かれています。男はつぎつぎに頁をめくりながら、ある“世界の秘密”を二人に伝えます。『銀河鉄道の夜』の旅は、心の宇宙とともに、本と文字の宇宙の旅でもあります。

(注: 現在出版されている「銀河鉄道の夜」決定稿には黒い帽子の男の話は出てきません。賢治が推敲の中で削除したと判断されたためです。)